

# 「森銑三刈谷の会」だより No. 19

発行 2023/4/15 (月刊・メールでの投稿歓迎)  
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会  
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu\_s@katch.ne.jp

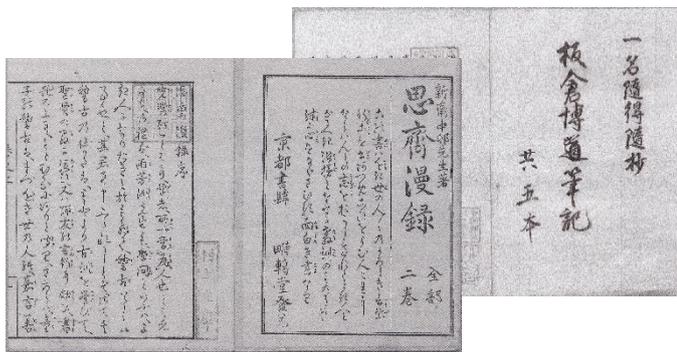


図 紹介された刈谷市中央図書館村上文庫の蔵書『思齋漫録』『板倉博道筆記』の内題部分。『思齋漫録』序文には「村上文庫」「刈谷図書館蔵」の蔵書印が見える。

## 第19回 (2023/3/18) 前川芳久さん「村上文庫の随筆書は楽しい」参加14人 神谷磨利子

「森銑三刈谷の会」だより No. 18 で触れたように、銑三の名古屋図書館勤務時の初代館長・阪谷俊作について調べている際に、前川芳久さんの論文に初めて接した。「市立名古屋図書館における阪谷俊作館長の業績および著作目録」(2010年『中部図書館情報学会誌』50)である。その後、前川さんが村上文庫の蔵書を読むために名古屋から刈谷まで通い、朝9時の図書館開館と同時に2階・郷土参考資料室で村上文庫電子データを読んでいることを知った。前川さんは村上文庫の中でも主に随筆を中心に読んでいたとのことだが、今回は森銑三の著作に関連のある随筆を選んでくださったことが分かる。中村新斎「思齋漫録(しせいまんろく)」からは、老母が家の前の堀川の水音の高いのを気にして何回も問うのに、何回でも同じ答えをする孝行息子窮楽の話を紹介された。銑三には窮楽の逸話をまとめた「亀田窮楽」(『著作集』正編第3巻 pp. 158-166)がある。また『新著聞集』の「了然禅尼面を焼て法をもとむ」の話も銑三に縁が深い。了然(りょうねん)はその美しい容貌のために白扇和尚に入門を許されなかったが、焼いた火かきでわが面を焼いて、やみ難い決心を示し、願いを聞き入れられたという話である。銑三は資料を集め了然尼の生涯を考究し、この話が伝説でなく実話であることを明らかにしている(「了然尼」『著作集』正編第9巻 pp. 217-238)。しかも著者名が書かれていなかった『新著聞集』の著者が、紀州家の土神谷善右衛門(養勇軒)であることを明らかにしたのも銑三である(「新著聞集とその著者」『著作集』正編第11巻 pp. 119-126)。

村上文庫に特徴的な書物として『板倉博道筆記』の紹介があった。別書名を『随得随抄』といい、村上文庫にしか所蔵のない書物である。さらに興味深かったのは村上忠順編『随筆便覧』で、忠順が選書した55冊の書物の索引である。書名に略称を付け、索引語にその略称と丁数が記されている。例えば『世事百談』は「世」とし、「加藤清正」は「世四ノ五、同四ノ六」に書かれているといった具合である。忠順の根気の良い仕事ぶりに感嘆した。銑三の資料の整理法との共通性を感じた。「村上文庫の随筆は楽しい」を満喫した。この会にふさわしい話題を提供していただいた前川さんに感謝する。

## 前川芳久さんと電子化された村上文庫

鈴木 哲

前川芳久さんは刈谷市郷土文化研究会『かりや』43(2022)に『資料紹介』名著寸猫および随筆書のお咄し、同44(2023)に「随筆話談―狂歌興趣と懸想文売りなど四編」を寄稿いただいた。『中部図書館情報学会誌』62(2022)には「名著点描一冊及び随筆書のお咄し二題：村上文庫 江戸時代の蔵書より」がある。4/16(日)郷土文化研究会総会(中央図書館)でのご発表「随筆話談」を楽しみにしている。

「村上文庫」は人口に膾炙しているが、利用者は多くない。前川さん以外の『かりや』における村上文庫言及は、平野大治「本草学について」『かりや』2-5(1981-84)、世古口徹「村上文庫と私」同6(1985)、同「村上文庫の医書一」7(1986)、平野「村上忠順翁一」10(1989)、高木浩明「村上文庫資料の魅力」35(2014)の3人、8編である。

2014/4に電子化され、端末が図書館郷土参考室にある。件名・著者による検索が容易になり、画面が鮮明、ページ操作と印刷が容易になった。印刷機すらなかった時代の銑三が見れば驚嘆するだろう。国立国会図書館端末(左手)とともに、村上文庫端末(奥)は活用されて良い。

刈谷図書館の起源が若き日の森銑三(1895-1985)による「村上文庫」整理にあることは知られているが、刈谷市史(1993)3:699など多くが刈谷図書館従事を1915年夏からとしている。正しくは翌1916年である(「刈谷町立刈谷図書館」日誌)。が、これは、また別の話である。

## 今後予定

2023/4/15 (土) 神谷磨利子 市立名古屋図書館から  
文部省図書館講習所へ

2023/5/20 (土) 鈴木哲『森銑三著作集』正統2編4版